

青年期における成長不安と風景構成法描画 および自己嫌悪場面変容志向との関連

山本 誠 一 (立正大学心理学部)

The relationship of Landscape Montage Technique (LMT) and intention to change the negative self to positive anxiety in adolescence

Seiichi YAMAMOTO (*Faculty of Psychology, Rissho University*)

Abstract

This study examined the relationship of landscape montage technique and intention to change the negative self when experiencing feelings of self-disgust to positive anxiety in adolescence. Landscape montage technique, positive anxiety scale and the questionnaire of an intention to change the negative self when experiencing feelings of self-disgust were administered to 191 undergraduates.

The results indicated the followings :

- 1) The greater scale of mountain image was positively related to a higher positive anxiety.
- 2) Adolescents who drew the landscape of summer season had a higher positive anxiety than those who drew the other seasons.
- 3) A higher degree of positive anxiety was related to a higher degree of intention to change the negative self when experiencing feelings of self-disgust.

From the perspectives of psychological development, individuation process, and self-realization, the concept of positive anxiety in adolescence was discussed.

Key words : adolescence, positive anxiety, landscape montage technique, feelings of self-disgust, intention to change the negative self

問題と目的

青年期は、身体・心理・社会等の様々な次元で、これまでの子どもの世界から未知の大人の世界への移行期であり、青年自身のこれからの人生の行方を含め、その不確かさから、意識的無意識的に不安を感じるものが少なくないと考えられる。

山本 (1992, 1997) は、この青年期の不安の特質として、不安の抑制的、病的等のいわばネガティブな面 (「抑制不安」と命名) とは異なり、逆に、半ば衝動的であり実行動誘発的、促進的で、そのプロセス及び結果において青年の人間の成長を促進する、いわばポジティブな面もあることに着目し、この不安概念を「成長不安」と命名して、検討を行ってきた。しかし、この青年期の「成長不安」のより無意識的な側面に着目して、無意識面が投影されると仮定する「投影法」との関係性を体系的に検討した先行研究や、また、より意識的ではあるものの統制困難な感情的側面を含む意

味で無意識に近接すると考えられる「自己嫌悪感」との関係性を検討したものは見当たらない。

本研究は、「成長不安」のより無意識的な側面に関して探索的な検討を行うことを主目的とし、具体的には以下の2点を目的とする。

第一には、中井久夫が1969年に創案 (中井, 1984) した風景構成法 (Landscape Montage Technique : 以下 LMT と略記する。) を用い、IMT 描画に投影される青年期の成長不安の特質を検討することを目的とする。特に、終生の到達目標や立ちほだかる障害の意味も含意する (山中, 1984) アイテム「山」に着目した検討と、内容が拡充され意識化される PDI 記述の内容から成長不安との関連性を検討したい。なお、この LMT の発達に関連する先行研究に、前思春期から思春期を中心に発達の段階の構成度などの特徴に関して検討を行ったもの (高石, 1996) や、発達の様相を扱ったもの (弘田, 1986)、自我同一性との関連を検討したもの (山崖・笠井, 2006) 等が行われてきたが、

青年期の成長不安との関連を人間の成長に焦点づけて扱ったものは見当たらない。

第二に、意識レベルではあるものの、意識的統制がしにくい感情的な側面も含む「自己嫌悪感」との関係、特に青年期における自己嫌悪感場面での自己形成促進的な変容志向（水間、2003）との関係を検討することを目的とする。

方法

(1) 調査対象・時期：

大学生191名（男性：50名、女性：141名）、年齢20.45（ $SD=3.00$ ）歳、2014年10月実施。

(2) 施行手続き：

大学の講義にて、記載及び口頭による研究倫理的な配慮のもと、一斉個別記入により施行した。手順として、始めにLMTを実施し、彩色まで含めて終了後、引き続きPDI（Post Drawing Inquiry：描画後の自由質問10項目－「この風景の「季節」は、春夏秋冬のいつ頃ですか」等）、そして以降の質問紙調査へと進むよう指示した。

(3) 質問紙調査について：

① 「成長不安」尺度：6件法10項目（山本、1992；例として、「将来、夢や理想が実現できるかどうか気がかりだが、とにかくやっつけていくしかない。」「なにか目標に向かって前進していないと、落ち着かない。」「まだまだ努力が足りないのではと心配になる。」等）

② 自己嫌悪感場面での反応としての変容志向の程度：5件法7項目（水間、2003）。以下に教示文、及び項目例を記す。

教示文：あなたが『自分がいやだ』とか、『自分がきらいだ』とか感じるとき、その『いやな自分』について実際にどうしがちであるかを考えてみてください。次の項目にどれくらいあてはまるでしょうか。該当するところに○をつけてください。

項目例：「そのことについて反省して何とか変えていこうと思う」、「そのことについて考え、何とかしようと思う」、「そのことについて何とか改善していこうとする」、「もっと自分を高めていこうと努力しようと思う」、「そのことをどうすれば変えていけるかを考える」、「そのことを克服するためにいろんなことをやってみようとする」

なお、質問紙調査①②に関しては、2014年10月実施のLMTを含む調査に加え、大学生対象の2014年7月実施済み質問紙調査のみのデータも含め分析した。結果、大学生275名（男性：78名、女性：197名）、年齢18.86（ $SD=2.70$ ）が分析対象とされた。

分析結果と考察

(1) 描画アイテム「山」と成長不安との関係について

まず、描画アイテム「山」について、その圧倒的雄大さ・峻険の程度、非日常性、彼方に存在する感じ、連山、存在感等の観点から4段階分類し、「山」描画の豊かさ程度と命名した。（この「山」描画の豊かさ程度4段階の分類評定については、調査者と臨床心理学を専攻する院生1名とで評定し、評定者間一致率96.34%を得た。）「山」描画の豊かさ程度を、独立変数（貧弱・やや貧弱・やや豊か・豊かの4水準）とし、成長不安を従属変数とする一要因分散分析を行った。

その結果、有意な主効果（1%水準）が認められたので、TukeyのHSD法による多重比較検定を行ったところ、図1、表1のような結果を得た。

以上の結果から、LMTでの「山」描画特徴の雄大さ・峻険さ、非日常性、彼方感、聳え立つ連山等などの豊かさ程度が、高い人ほど成長不安が高いことが示唆された。

山中（1984）は「山」のもつ象徴・意味について、『……遙かかなたに雪をいただいて聳える山は、きっと一度はあの山に登ってみたい、との望みを抱かせ、終生の到達目標としての位置を占めることもあろう。一方で眼前に立ちほだかり、行く手を塞ぐ山である場合、立ちほだかりの障害を意味することもある。ゆえに、「山」は描く人のおかれた「状況」と、今後の「見通し」を与えるよすがとなることがあり、しばしば乗り越えねばならぬ問題の数を示唆することもある。』と述べている。また伊集院（2013）では、山は理想と現実との隔たりを表していることも多く、乗り越えねばならぬ問題の数を示唆していることもある等とされる。以上からも、成長不安の高い青年、いわば個性化欲求や自己実現衝動・強迫性の強い青年は、風景構成法の「山」にそれを投影していることが推察されるだろう。

今後、この「山」アイテムの特徴に関して、さらに検討するためには、より自我強度の低さとの関連が推察される、より病的で否定的な不安の側面である「抑制不安」（山本、1992）と「山」描画特徴との検討も、傍証的な意味で重要な検討事項と考えられるだろう。

(2) PDI記述での「季節」と成長不安との関係について

次に「季節」について、3つの季節を独立変数（春・夏・秋の3水準、冬は出現率が1%未満のため除いた）とし、成長不安を従属変数とした一要因分散分析を行った。

その結果、有意な主効果（1%水準）が認められたので、TukeyのHSD法による多重比較検定を行ったところ、図2、表2のような結果を得た。

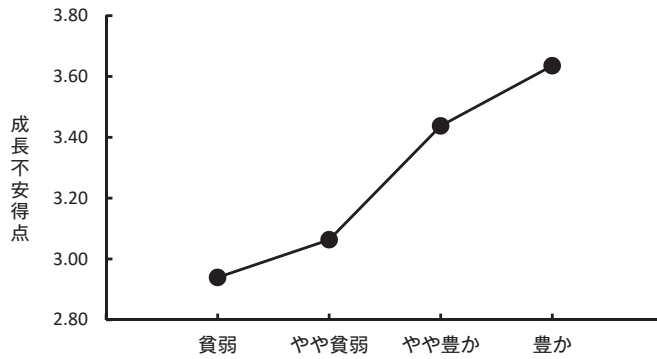


図1 「山」描画の豊かさ程度による成長不安の変化

表1 「山」描画の豊かさ程度による成長不安得点の変化

独立変数	「山」描画による成長不安得点の平均値と標準偏差				F 値	群間差 (Tukey)
	貧弱 (n=66)	やや貧弱 (n=44)	やや豊か (n=39)	豊か (n=29)		
成長不安	2.94 (SD=0.42)	3.06 (SD=0.42)	3.44 (SD=0.39)	3.64 (SD=0.53)	F (3.174) =23.117**	貧・やや貧< やや豊・豊**

**p<.01, *p<.05

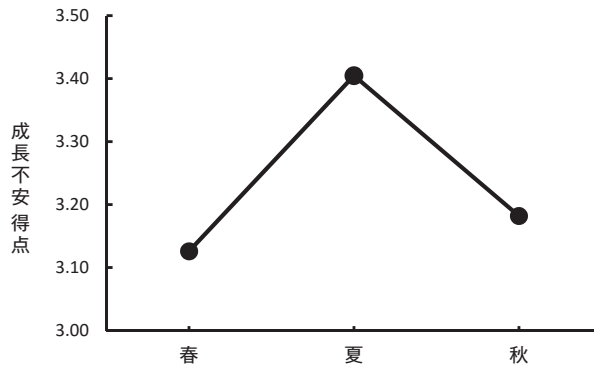


図2 「季節」による成長不安の差異

表2 「季節」による成長不安得点の差異

独立変数	各季節における成長不安得点の平均値と標準偏差			F 値	群間差 (Tukey)
	春 (n=72)	夏 (n=54)	秋 (n=42)		
成長不安	3.13 (SD=.55)	3.40 (SD=.50)	3.18 (SD=.43)	F (2.165) =4.901**	春<夏** 秋<夏†

**p<.01, *p<.05, †<.10

以上から、LMT 描画において、季節に関して「夏」を投影するものは、他の季節に比べて成長不安が高いことが示唆されると考えられる。

この点も、特に四季のある日本において夏という季

節は、降雨量と高い気温、日照時間の長さ等もあって、決してしのぎやすい時季ではなく、むしろ冬とは異なる意味で厳しい時季でもあるが、一般的に他の季節に比べ一番、動植物の成長が顕著な時期と考えられる。

このような季節「夏」の特徴に、成長不安の高い人は、内面の人間的成長欲求や衝動を投影するものと考えられよう。

(3) 成長不安と自己嫌悪感場面での変容志向の関係について

次に、成長不安と変容志向性（自己嫌悪感の一反応として）との関係を検討するため、成長不安を程度を独立変数（低・中・高の3水準）とし、自己嫌悪場面の反応様式としての変容志向性（水間, 2003）を従属変数とする分散分析を行った。

その結果、有意な主効果（1%水準）が認められたので、TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、図3、表3のような結果を得た。

以上から、成長不安の高い人ほど、自己嫌悪感場面での変容志向性が高くなることが示唆される。

水間（2003）は、佐藤（2001）の自己嫌悪感に関する記述を要約し「……自己嫌悪感という否定的感情のもつ独自の性質を最も特徴づけるものは、佐藤（2001）の述べるように、今よりもっと肯定的な方向にある自己を求める心性と共に存在する、自己への否定的感情という点であると思われる」と述べ、自己嫌悪感場面で喚起される自己形成への変容志向性について検討し、日常的自己内省や未来イメージ肯定性、自己嫌悪感体験頻度等との関連性を導出している。自己嫌悪感成長不安に比べ、その意識レベルの程度が高い感情

である点で異なるが、今回の結果から、どこかで共通項を持つことが示唆される。おそらく個人の自我強度や超自我のあり方、否定性としてのアニムス、パーソナリティ諸特性、その時の発達水準等の諸要因が総合して、強く自己否定的・自己嫌悪的に意識するか、より衝動的な成長へ駆り立てられる心境（気分）としての不安・心配となってしまうかの個人的体験様式が、決まるのではなかろうか。ただどこかで両者は共通項で繋がっているため、正の関係となったのであろう。この共通項は、自己嫌悪感も成長不安も、当該の個人は少なからず不快や苦悩の状況に囚われることから、個人の意志によるコントロールを超えた性質を持つものであることが推察される。

今後の課題

今後、青年期の「成長不安」の検討として、LMTとの関連では、データを増やし、他のアイテム（例えば、大景群の「川」「田」「道」、中景群の「人」との関連等）との関連、PDIの詳細な分析、彩色容態との関連等の検討が望まれるだろう。また、他の人格諸特性との関連では、発達の「非定型化」（河合、2016）の視点を配慮した現代の青年の心性との関連や、従来の神経症的自我とも異なり、病理的とも言えない、日常的解離（舛田・中村, 2005）の心性や多面的自己の視点からも、「成長不安」との関連検討が必要になってくるだろう。その際、改めて人間的成長とは何か、個性化と

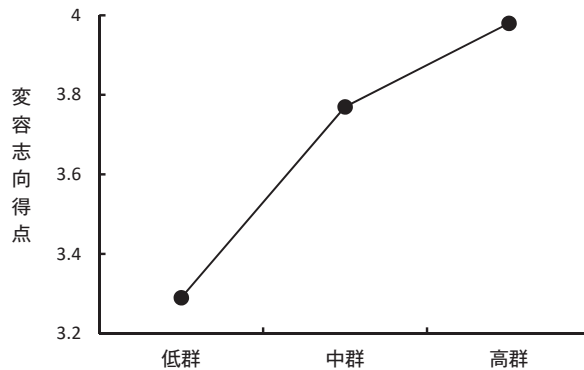


図3 成長不安の程度による変容志向得点の差異

表3 成長不安の程度による変容得点の差異

独立変数	成長不安3群における変容得点の平均値と標準偏差			F値	群間差 (Tukey)
	低群 (n=93)	中群 (n=108)	高群 (n=74)		
成長不安	3.29 (SD=.69)	3.77 (SD=.56)	3.98 (SD=.76)	F (2,272) =24.27**	低<中・高** 中<高†

**p<.01, *p<.05, †<.10

は何か、という人間にとって根源的な問いを再び問い直す必要が生じてくるのではないかと考えられる。

〈付記〉

本論文は、2015年日本心理臨床学会第34回秋季大会にて発表した内容を、一部加筆修正したものである。また、本研究は、立正大学心理学研究所の2014年度の共同研究助成を得て行われた。

引用文献

- 伊集院清一 (2013). 風景構成法——「枠組みのなかの心象」. 金剛出版
- 河合俊雄 (2016). 発達障害の増加と発達の「非定型化」. 河合俊雄・田中康裕 (編著) 発達の非定型化と心理療法. 創元社, 4-24.
- 舛田亮太・中村俊哉 (2005). 日常的解離尺度 (短縮6項目版), 日常的分割投影尺度 (短縮8項目版) の構成概念妥当性の検討. パーソナリティ研究, 13, 208-219.
- 水間玲子 (2003). 自己嫌悪感と自己形成の関係について——自己嫌悪感場面で喚起される自己変容の志向に注目して—— 青年心理学研究, 51, 43-53.
- 中井久夫 (1984). 風景構成法と私. 山中康裕 (編) 中井久夫著作集別巻1 H・NAKAI 風景構成法. 岩崎学術出版社, 261-271.
- 佐藤有耕 (2001). 大学生の自己嫌悪感を高める自己肯定のあり方. 教育心理学研究, 49, 347-358.
- 高石恭子 (1996). 風景構成法における構成型の検討——自我発達との関連から. 山中康裕 (編著) 風景構成法その後の発展. 岩崎学術出版社, 239-264.
- 山崖俊子・笠井仁 (2006). 風景構成法における「道」と「川」の描かれ方と自我同一性達成との関連について. 津田塾大紀要, 38, 169-186.
- 山本誠一 (1992). 青年期における不安の二側面に関する実証的検討. 心理学研究, 63, 8-15.
- 山本誠一 (1997). 不安, 悩み, 孤独感. 加藤隆勝・高木秀明 (編著) 青年心理学概論. 誠心書房, 81-97.
- 山中康裕 (1984). 「風景構成法」事始め. 山中康裕 (編) 中井久夫著作集別巻1 H・NAKAI 風景構成法. 岩崎学術出版社, 1-36.

要約

本研究は、青年期の人間的成長を駆動する「成長不安」(1992, 山本)と、風景構成法(LMT)描画および自己嫌悪感場面の変容志向性との関連性の検討を目的とした。LMTを含む質問紙調査を合計191名の大学生に施行し、「成長不安」と、1) LMTのアイテム「山」描画, 2) PDIでの季節設問, 3) 自己嫌悪場面の変容志向性(水間, 2003)各々との関連を分散分析により検討した。主な結果は以下の通りであった。1) 「山」描画が雄大さ・峻険・連山等の点で豊かになるほど、成長不安が高くなること, 2) 季節に関して「夏」を投影するものは、他の季節に比べて成長不安が高いこと, 3) 成長不安が高くなるほど、自己嫌悪感場面でのネガティブ自己変容志向性が高くなること。その後、人間的成長や個性化の観点から、「成長不安」に関する議論を行った。

キーワード：青年期、成長不安、風景構成法(LMT)、自己嫌悪感、自己変容志向